

特色ある共同利用・共同研究拠点 期末評価結果

大学名	大阪市立大学	研究分野	都市研究
拠点名	先端的都市研究拠点		
学長名	荒川 哲男		
拠点代表者	阿部 昌樹		

1. 拠点の概要 ※期末評価報告書より転記

[拠点の目的]

都市研究プラザ(以下、URP)は、本拠点申請における中核機関としてグローバルCOE「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」を推進し、独自に築いた海外ネットワークとの協力の下で研究実績を積んできた。今回、URPがイニシアチブを取り、これまでの国際的な地域連携型学知と実践知のプラットフォームによる研究活動の蓄積によって育まれた、国内外の包摂型現場ネットワーク、幅広い域外・越境ネットワークの活用による共同研究活動を最大限活かす形で、同志社大学創造経済研究センター及び日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センターとの共同利用・共同研究に向けた拠点申請に応募する。

本応募では、これまで蓄積してきた研究や学術資源を、さらに地域や一般社会、かつ共同研究機関と共有・協力していくプロセスを重視し、各共同研究機関が積み上げてきた都市研究における先端的取り組み(21COE:NFUアジア福祉社会開発学(平成24年度LP補助事業に、共同申請を行いヒアリングに残るなどの実績を持つ)、G-COE:OCU-URP文化創造と社会的包摂に向けた包摂型アジア都市論、同志社大(私立大学戦略的研究拠点)による創造経済研究をスケールアップしていくための連携型拠点として整備を図っていく。これらの取り組みは、世界及びアジアの都市をフィールドに据え、文化創造と社会包摂に資する先端的都市論を構築する共同研究と研究拠点の形成を行う中で、「21世紀型のレジリエント(復元力に富んだ)都市」のあるべき理念モデルと実践モデルを彫琢していくことが期待できる。そして、共同研究機関とのコラボレーティブ・リサーチ・プロセス(CRP)による学術資料の収集・共有システムの整備や、アーカイブの蓄積による現場基盤型都市研究の最先端学術基盤のプラットフォームの整備を推し進め、共同研究機関及び共同利用機関との共同研究を繰り広げていく基盤として活用する。

[拠点における成果及び目的の達成状況]

申請以前に築いた共同研究活動のネットワークを活用し、発展させる方向で推進された共同利用・共同研究は、多数の学術論文はもとより、単行本4点、ブックレット「URP先端的都市研究」シリーズ17点などの刊行物や、「URP10周年記念国際シンポジウム」などの国際共同の学術交流会議、その他数多くの学生および一般市民向けの研究会の企画として結実した。また、国内の研究機関が編集拠点としての役割を担う社会科学分野では数少ない国際学術誌『City, Culture, Society (Elsevier社)』の刊行を継続し、公募型共同研究の成果発信に向けた複数の国際シンポジウムなどの本申請以前から続いていた国際的な研究成果の発信に向けての取り組みは、この国際学術誌の編集にも反映され、その成果は、この国際学術誌のインパクト・ファクターの上昇や投稿者の国籍の多様化に結実した。それとともに、グローバルCOEの拠点として採択されて以来掲げている「文化創造」と「社会包摂」というキーワードや、共同利用・共同研究拠点に採択されて以来、繰り返し強調している「都市のレジリエンス」というキーワードは、学際的研究者コミュニティをまとめ上げる結節点としての役割を果たしている。その結果、本拠点は、研究者のみならず東アジアにおいて各種都市問題の解決に取り組む行政機関や市民社会組織などとも、最新の研究成果を共有するプラットフォームとして発展し、そうしたネットワークの拡充が、拠点事業のいっそうの機能強化へとつながっている。さらに、拠点事業の対社会的な公開と透明性を図るため、ニューズレターを定期的に発行するなど情報発信を充実させる一方で、国際公募により優秀な若手研究者を「特別研究員(若手・先端都市)」として採用し、自身の研究を深めてもらうとともに、共同研究にも参加してもらい、その研究実績をもとに大学など研究機関に向けて輩出してきた。本拠点が申請以前より蓄積してきた研究成果や学術資源が活用され、新たな研究成果に結び付き、それが国内外に広く

発信されるとともに、実践力のある研究人材の育成にも貢献し、そうした研究成果や研究人材が研究者ネットワークの拡充をもたらすとともに、再び本拠点に継続的に活用可能な資源としてインプットされるという好循環が実現していることを、本拠点事業の大きな成果として挙げるができる。

2. 評価結果

(評価区分)

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献していると判断される。

(評価コメント)

当該拠点は、アジアの諸都市をフィールドとした都市研究を、国内外の研究機関や地域との協力により発展させることにより、21世紀型のレジリアント（復元力に富んだ）都市の理念や実践モデルの構築等を図ることを目的として拠点活動を実施している。拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティにも貢献している。

特に、共同研究による成果を多数の学術論文をはじめ、一般向けの書籍として刊行するとともに、国際シンポジウムの開催など、研究成果の情報発信に積極的に取り組み研究者コミュニティのまとめ役としての役割を果たしている。また、国際公募により若手研究者を独自の「特別研究員（若手・先端都市）」に採用し、共同研究に参画させ、研究成果を報告する場を設けるなど、人材育成にも取り組み、関連コミュニティの充実を図っている。

今後は、これまでの研究実績を踏まえ、今後の拠点活動の方向性を明確化するとともに、共同利用に供する施設・設備等の活用実績を客観的に把握し、拠点活動の改善に繋がったりすることなどにより、拠点活動の一層の充実に取り組むことが期待される。